

〔古典紹介〕 松本歯学 16 : 348~359, 1990

key words : Guy de Chauliac — Chirurgia magna — 歯科学的記述

Guy de Chauliac の Chirurgia magna における 歯科学的記述について

市川博保

東京都

On the Articles of Dentistry
in Guy de Chauliac's Chirurgia magna.

HIROYASU ICHIKAWA

Tokyo

Summary

Guy de Chauliac, the greatest surgeon in the 14th century, wrote his *Chirurgia magna* in Latin, and this book was soon translated in to several languages and was widely read until the 16th century. In 1890, É. Nicaise made a comprehensive annotated edition of *Chirurgia magna* in French. In 1909, V. Guerini quoted articles on dentistry in *Chirurgia magna* from Nicaise's book in his work, *A History of Dentistry*.

Recently, I read that *Chirurgia magna* was revised and enlarged by L. Joubert in 1585, and so I compared this edition with the articles on dentistry in Guerini's work.

I found that Guerini had omitted many diseases treated by dentists, including ranula, aphtha, dislocation and fracture of the mandibula etc. Also, Joubert inserted Ambroise Paré's illustrations of dental instruments in his book.

緒 言

14世紀の最も著名な外科医であった Guy de Chauliac (c. 1300—1368) のラテン語による著書 *Chirurgia magna* [大外科学] (1363年著, 以下本書とする) は, 当時の優れた外科学書として各国語に翻訳され Ambroise Paré (1510—90) の外科学全集 (1575年初版) が出版されるまで, 広く使用されたという。

1890年に, パリの外科医, 医学史家 Édouard

Nicaise は本書の完全な注釈書といわれるフランス語訳本を完成させた。本書の中にある歯科学的記述は, この Nicaise 訳本から採ったものを Vincenzo Guerini が彼の歯科医学史 (1909年刊) の中で紹介している¹⁾。わが国では, 川上為次郎が Guerini の記述を, 少し削除し直訳のまま彼の歯科医学史 (1931年刊) の中に採り上げている²⁾。

筆者は最近, モンペリエ大学総長であった Laurent Joubert 父子による本書のラテン語の改訂増補版 (1585年刊) を披見する機会を得, Guerini



図1: Guy de Chauliac の像



図2: 本書のカタロニア語訳本の飾り文字。

左端の人物が講義中の Guy de Chauliac であるという。

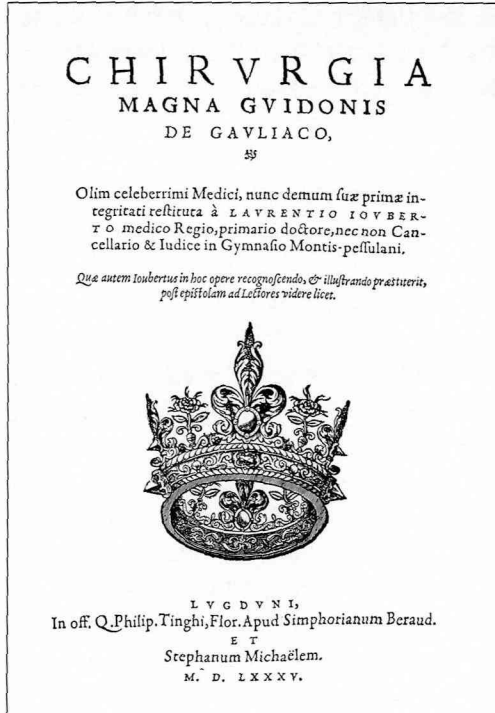


図3: Joubert 本のタイトルページ

が紹介した Chauliac の歯科学的記述と比較対照したところ、些かの知見を得たので報告する。

筆者が披見した本書の Joubert による改訂増補版は、ダルムシュタットの Wissenschaftliche Buchgesellschaft による復刻版(1976年刊)で³⁾(図3),これを Guerini の歯科医学史と比較対照したが、川上の歯科医学史も参照した。

Guy de Chauliac について

Guy de Chauliac は、13世紀の終わりにオーヴェルニュの寒村で生まれた、僧籍に入って初等教育を受けたのち、トゥールーズで外科を、モンペリエで医学を学び、さらにボローニャで外科と解剖学を学んだという。彼はモンペリエやリオンで、医師として働いたが、アヴィニオンでローマ法王庁にも勤務した。彼の豊かな知識と経験をもととした著述の主なものに、膏薬類の処方を集めた *Formulare* (のちに *Chirurgia parva* [小外科学])と *Inventorium s. Collectorium artis chirurgicæ medicinalis* (のちに *Chirurgia magna* [大

外科学]）がある。

本書について

本書は、写本（手稿）の形で世に出され、まずフランス語、プロヴァンス語に翻訳され、さらにイタリア、イギリス、オランダ、ヘブライなどの諸国語にも翻訳されて、16世紀に Paré の外科学全集が出版されるまで、代表的な外科学書として使用されていたという。本書が執筆されたのは1363年であるが、1478年にリヨンで初めて印刷された。

本書は、表1（目次）によって示すように解剖、膿瘍、創傷、潰瘍、骨折と脱臼、その他の外科的疾患、薬剤の7つの分冊で構成されている。

本書の歯科学的記述について

本書の歯科学的記述の大部分は、第6分冊「その他の外科的疾患」の中にある。

Guerini の紹介したものは、第1分冊（Tractatus I）第2教科（Doctrina II）第2章（Capitulum II）「顔面とその付近の解剖」のうち、歯の解剖学に関する部分、第6分冊、第1教科、第8章「四肢の過剰部の切除」の中で述べられている吸入麻酔法、第6分冊、第2教科、第2章、第5部（Pars V）「歯疾の一般用語、歯痛、動揺と弱り、腐敗、虫歯、侵蝕、歯の穿孔、歯の汚れと変色、歯の麻痺と凝結（歯が浮くこと）、抜歯」の項目である。しかし、これらは歯の疾患だけに局限されたもので、本書には、この他にも現今の歯科臨床で、取り扱っていると考えられる疾患が、記述されているので、それらを、目次の順を追って、採り上げてみたい。

第1分冊、第2教科、第2章「顔面とその付近の解剖」の中から、歯に関する部分だけを Guerini は紹介しているが、この章には他に側頭、頬、顎などによって、顔面が形成され、頬、口唇、下顎骨の運動に参与する筋肉のあることを述べ、口腔は口唇、歯、舌、口蓋、口蓋垂によって形成されていることや、舌の働きや唾液腺の存在を明示している。

第3分冊、第2教科、第2章「耳と口唇の創傷」では、この創傷は、縫合か結紮によって治癒させる、という2行だけの解説である。

第4分冊、第1教科、第1章「口唇の硬結と変

色を伴う潰瘍」の項では「Avicenna によれば、潰瘍を取り囲む病変が、緑色や黒色を呈するときは、切開して血液を放出すべきで、吸角子を用いてはならない。創面を乾燥したスポンジで清拭したのち、適当な薬剤を用いる。これに対し Galen は、自然の成り行きを重視し、治療書の中で、切開はしないで薬剤を適用しながら経過を監視すべきで、長い経過をとっても回復の喜びは得られる、と述べている」と解説している。

第4分冊、第2教科、第2章「アフタと口腔潰瘍」では、口腔の潰瘍を鼻の項で解説したものに付け加えると前置きして「口腔内の表在性潰瘍を Galen はアフタ aphthis, Avicenna はアルコラ alcola と呼んだ。それは、灼熱感のある歯肉の瘡のようなものではなく、Communitas で述べられている骨の瘻孔または痔疾のようでもない。

原因は、鼻の疾患と同じであるが、若年層では悪い授乳や消化不良が原因となる。

視診や触診による症状であるが、色は体液の性質を表す。赤は多血質を、黄は胆汁質を、白は粘液質を、黒は黒胆汁質を示す。

口腔潰瘍の多くのものは、口腔内に膿疱、深潰瘍、膿瘍を継発する。Galen は、熱や湿気（分泌物）のあるところでは、早く化膿または腐蝕が起り、難しい症例であると指摘している。薬剤は、唾液によって流されるので、長く局所に停滞できるものは少ない。

治療法は、ある程度鼻の場合と同様であるが、アングリーナのところで述べた舌静脈からの瀉血は推奨できる。そして、つぎのような独自の薬剤がある。深潰瘍のとき用いられる穏やかな乾燥剤、例えば diamoro、木苺の実、堅い木の実の液、イトスギの実などである。Avicenna は、さらに、乳香と漆を付け加え、Communitas には、この他、オオバコ、スイカズラなどの液剤が記述されている。腐敗性のものには、蜂蜜で甘くしたブドウ酒やクサノオオ、イトスギ、ハマスゲ、metastri、五倍子、サフラン、ミルラの煎じたものが推奨できる。腐蝕性のものには、明礬などの礬類がよい。歯槽膿瘍（parulis）のときは、小さなパンと柔らかい鹿肉で症状を和らげるか、子牛の肉と西洋カリンなどの収斂性のある果物を与える。その他、チジャ、キクジサ、スベリヒユなどを与える。そして、漆やバラのような穏やかな収斂剤で洗い、

発汗作用のある香油を塗布する。膽礬や収斂性のある酢を加えることもある。もし、アフタが汚いときは、さらに蜂蜜を加える。腐蝕のあるときは、油と膽礬から作った温かい薬剤を塗布する。温の空気（注：四体液論による）が原因の潰瘍には、銹に蠟を塗るのと同様に、適当な薬剤を塗布する。歯肉に腐蝕性または癌性の潰瘍があるときは、摩擦して悪い血液を搾り出し、海葱の酢で洗う」と述べ、以下多くの薬剤を挙げたのち、瘻孔を抜歯によって治癒させることに言及している。また「堅い癌性の増殖物を治癒させるのは難しいが、柔らかい増殖物は切除するか必要があれば結紮する。基底部を結紮すると出血しない。

口唇に裂溝があるときは、香油またはクルミの実から採った油を塗布する。Roger と Albucasis は、裂溝が深いときは焼灼すると述べている」と記載している。

第5分冊、第1教科、第2章「下顎骨折の特別整復」の項では「頭蓋骨と鼻骨の骨折については、第3分冊創傷のところで述べたが、下顎骨折にもそのことが当て嵌まる。Haly ben Abbas, Albucasis, Avicenna によれば、下顎骨折があるときは、指を患者の口腔内に入れてもとの位置に整復するが、それは歯の位置によって知ることができ、正しい歯列にすればよい。整復したのち歯を塗蠟糸、銀線または金線で固く結紮する。歯の上に麻屑や布切れをクッションとして置く。包帯で下顎を被い、耳の下を通して顎の後ろで結び、さらに前に廻して前頭部で結ぶ。固着するまで、必要があれば何度でも同じ方法を繰り返す。食事は、咀嚼による負担がかからないような流動食にする。Avicenna や Albucasis によれば、固着するまでに、およそ20日間を要するという」と述べている。第5分冊、第2教科、第2章「顎関節脱臼」では「顎関節は、弛緩したり、強直したり、脱臼することがある。前方に脱臼したときは、無力化したように開口が残る。後方に脱臼したときは、Avicenna がいうように、下顎前歯の位置は上顎前歯のさらに下内側になる。Lanfranc は、口を開けることができないが強直ではないと述べている。

脱臼の症状は、一般に知られてもの以外に、上顎と下顎が決して咬合しないことである。Avicenna と Haly ben Abbas の報告によれば、早く整復

しないと硬化し、発熱、疼痛、胆汁質が流れるなど、他にも悪いことが起こり、10日を過ぎると、患者は死亡するという。

整復法は、後方脱臼のときは1人の助手が、患者の頭を保持し、術者は拇指を口腔内に入れ、他の指は下顎下縁に置く。指に力の無いときは木の楔を口腔内に入れ、下顎を強く引っ張って耳の骨の位置に戻す。前方位の脱臼のときはGulielmus や Lanfranc によれば、頤部に正しく固く帯を置いて、頤全体を包み、助手は（離れたところに力が入るように、楔を口腔内に入れる）仰向けになって、患者の上膊を膝で支え、帯を頭の後方に向かって強く引く。Jamerius もそのように教えている。回復は、神が与え賜ったものである。回復したあとは、硬膏剤を貼布するのが通例である。骨折のところで述べた包帯による結紮を行うと、4日で元通りになり、12日以内には安心できるようになる。それまでは咀嚼で苦勞することのないように、流動食にすべきである。脱臼したままにしておくと硬化するので温水、油、その他のもので温めて軟化させてから整復する。悪い併発症や自発痛があるときは、頭をさすり、耳の後、顎、腋窩に温めたローズ油を塗ると良くなる」と記述している。

第6分冊、第1教科、第6章「四肢の過剰部の切除」の項に記載されている吸入麻醉法をGuerini は重要視して紹介しているが、この吸入麻醉法は、指の数が6本あるとか、関節の数が多いたなどの奇形の場合や四肢の壊死または壞疽のため四肢の切断を行う必要が生じたときに用いられた除痛法を述べたもので、麻醉法単独の項目ではない。Guerini は、この吸入麻醉法を「阿片、イヌホウズキ、ヒヨス、マンダラゲ、キヅタ、ドクニンジン、チシャの液汁によって痛みを感じなくさせるところから、新しいスポンジにこれらの液汁を侵して日光で乾燥させ、必要なときにこの海綿を温水につけてから眠りに入るまで、患者の鼻孔に挿入して手術を行った」と紹介している。

第6分冊、第2教科、第2章、第5部が「口腔とその付近の疾患」であるが、この第5部に歯科領域の疾患が記述されている。Guerini は、このおよそ半分について紹介している。

ここでは「Galen が、著書の中で示したように口腔疾患は独特なものである。口腔の働きを要約すれば、舌で味わうことと歯で咀嚼することの2つ

で、これは脳からの誘導によって左右される。口腔疾患の症状は、同一の疾患であってもいろいろな様相を示すことを Galen や Avicenna が、多くの症例で明らかにしている」という前文があって、以下つぎのように続く。

「舌の疾患」：「舌の働きを妨げる舌の疾患には、悪液質(dyscrasie)、潰瘍、アフタ、膿瘍、舌の肥大、ガマ腫、脂肪過多、痙攣または彎曲、麻痺または軟化、吃などがある。多くの疾患が、医学的理論に適合するが、外科医によっても治療される。膿瘍、潰瘍、アフタ以外のものはすでに述べた」

「舌の肥大と異常に大きくなる舌」：「これは、温の体液によるもので、Galen が、治療書の中で推める規定の食事、蘆薈丸の入った下剤をかけ、チシャの液で含漱する。このほか、頸の後ろに吸角子を用いるか舌静脈からの瀉血をすると効果がある。Rhazes や Avicenna の意見は、アンモニア塩で摩擦して唾液を導き出し、酢で洗口するのが良いということである。この方法は、乾の体液による頸部の乾燥にも良い」

「ガマ腫と舌下の肥大」：「Avicenna によれば、ガマ腫は舌下にできる楕円形の柔らかい肉塊である。ガマの形をして舌の働きを阻害し、舌がもう一つあるように見えるという。さらに、Avicenna は、当然治療すべきものであるがそれには収斂性、溶解性の薬剤としてマヨナラと塩の入ったザクロの樹皮を用いると述べている。薬剤によって治癒しないときは、手術によって中身を抜き取る。Albucasis が、ガマ腫を調べたところ、色は黒か暗黒色で硬く感覚はなく、癌に見られる所見はなかったという。また、このような所見が無く白くよく触れるときは、薄い壁を切り離し開放して中身を抜き取る。出血があればスポンジで拭い、必要があれば zegi (硫酸塩) を置いて圧迫による止血を行う。もし、手術が不十分であれば、再発するので再度手術を行う。Gulielmus de Saliceto によれば、術後ミルラの煎じたものとブドウ酒で含漱させ、回復するまで続ける」

「舌の痙攣と収縮」：「痙攣は、舌自体の短縮と彎曲で、舌の働きを阻害する。その原因は、湿気（注：四体液論の）の充満、乾燥による空白化あるいは靱帯による牽引である。湿気の充満に対する治療には一般的と特殊の二つの排泄法がある。一般的排泄法には蘆薈丸が用いられる。特殊排泄

法は頭の浄化、嚙み薬、トウバナその他の薬による含漱、頸に蒸気をあてるなどである。乾燥による空白化に対する治療は良い湿り気を与え、良い食事、良い含漱を行い、カワホネの油を頸や頭に擦り込む。また、温水や牛乳のようなものを強く注ぎかける。靱帯による舌の収縮の治療法は、舌が抑制されている所を切開し Albucasis によれば礬類と共に燈草を2・3日置く。Avicenna は、それが静脈に近いと考えられるときは、針で糸を通し靱帯の繊維が切れるまで結んで置くという。また、Lanfranc の助言によれば、熱した銀の rasorio (剃刀) で治療するという」

「舌の麻痺と吃」：「吃は、痙攣、潰瘍その他の舌の疾患から起こる。しかし、大多数のものは、神経や筋肉内の湿気（注：四体液論の）、舌内部の性質が原因の麻痺である。

その原因と症状であるが、通常の麻痺は、流唾を伴い、話しをすることが困難になる。また、Galen は、下痢が長く続くと吃になることと、麻痺の前兆として偶発的に吃になることを箴言の中で明らかにしている。湿気による麻痺や吃は、発熱によって治癒する。先天性の吃や慢性の麻痺は、完全に治癒することはない。子供の場合は、Avicenna がいうように、青年期に達するまでに矯正に努める。

治療法は、普通の麻痺は一般的な方法でできるが、Heben Mesue が提示した三つの優れた方法がある。第1は原因の転換、第2は脳の除湿、第3は湿気の消費であるが、第1の方法として浣腸、摩擦、後頸部へ吸角子を応用する。第2の方法としてカラシ、焼き塩その他の薬品による除湿用硬膏剤を頭上部に施し頭部の湿気を取り除く。また、頭頂、側頭、頸部、脊椎への腐蝕剤の適用は推奨できる。この後頸部に用いる硬膏剤の材料として、Haly ben Abbas は、カミツレ、シナガワハギその他を教えている。Heben Mesue は、麻痺に対して最も治癒力のあるものはテレピン油であると述べている。第3の方法は、含漱を充分に行う。口を洗うと舌が摩擦されるといわれている。麻痺が進行するようであれば蜂蜜の入った酢、海葱を用いる。粘液質の湿気（注：四体液論の）を引き出すために、アンモニウム塩、ショウガ、玉葱で舌を摩擦する。Heben Mesue が、含漱について経験の上から注意したことは、舌根部に集まった粘液

を溶解させるには、オリガン、マヨナラ、ナナギハッカ、菊科植物、ショウガなどの薬剤で毎日含漱させるのがよいということである。Lanfrancの治療法は、イチジク、蜂蜜、漿果、オイフォルビウムを混ぜて調製したものを豆粒くらいとり舌下に置く方法である。Rhazesが、麻痺に用いる薬剤として調製したものの処方アンモニウム塩、菊科植物、staphidis agriae、カラシ、胡椒、酸味のことを等量にとり、よく摺ったものを日に数回、舌の上と下に擦り込む。Haly ben Abbasは、蘆薈白桂皮、カラシ、菊科植物などを碎いて、舌に擦り込むことを指示している。舌の麻痺を和らげるために用いる医薬としての酸味(Dioscoridesの証言による)の適用については、多くの薬剤がある。サルビア、ヘンルーダ、トウバナ、herba paralysis、バジリコ、cauliculi agrestisなど、それぞれが、特色を持っている。Avicennaは、ピーパー香、アギ、テレピンチーナから作った丸薬を舌下に置くのが最も良い方法であると述べ、若年者には、塩類で舌を摩擦することを強調している。

つぎに、目次では「上述したアフタと潰瘍、膿瘍」とあるが、本文にはその記述が無いので、上述したというのは、第4分冊、第2教科、第2章「アフタと口腔潰瘍」のことであろう。

ついで、歯疾の記述に入り「歯疾の一般用語」「歯痛」「歯の動揺と弱り」「歯の腐敗、虫歯、侵蝕、穿孔」「歯の汚れと変色」「歯の麻痺と凝結(歯が浮くこと)」「抜歯」の項目があるが、これらについては、Gueriniと川上の著書に紹介されているので省略する。

つぎは「口唇、歯肉の疾患と含漱」であるが「口唇と歯肉の疾患として、肥大、膿瘍、裂溝が起こることは上述したが、治療法としては、悪い空気の流入とその膠着を防ぐ働きのある含漱をすることである」という短い解説である。

「口蓋垂の腫脹と脱落」:「Galenは著書の中で、大きく開口させ、舌を押し下げると、口腔内の奥に特徴のある肉塊が見えると述べている。ギリシャ語では「後方にある cionis」(それは柱状である)といい、我々は uvula という。口蓋垂の疾患は、先端が肥大し基底部は細くなる。前項と同様に、悪い空気の流入とその膠着を阻止すれば回復する。まれには蜂窩織炎を起こして苦しむことがある。

原因は、温または冷の性質(注:四体液論の)によるもので、体液の流れとして脳から下降する。

症状は、温の性質のときは発赤、温熱を示し、冷の性質のときはそれがない。Hippocratesの予後論によれば、切開は危険でとくに蜂窩織炎のときは、苦しむ結果となる。切開によって排膿しても、出血による窒息のため死亡することがある。しかし、暗青色、蒼白色、不整形で基底部が細いときは、切開は危険ではない。黒く、硬く、感じ易いものは(Avicennaがいうように)注意すべきで、メスを触れてはならない。検査して、脆くないものは癌であって、必然的に増殖し、突然、呼吸困難が起こり生命を奪う。Haly ben Abbasの考え方では、口蓋垂の全体を切り取ってはならない。これによって大いに苦しみ、胸部にも害を与えるという。

口蓋垂の治療には、一般的なものと特別なものの二つがある。一般的な治療法は、アンギーナのところで述べたような、排泄と転換と体液の流れを減少させることである。Rogerらは、口蓋垂の治療として柔らかくなってきた口蓋垂の先端に松、香、乳香を含ませた深紅色の布を置くと説いている。また、Heben Mesueは、成人では毛髪を刈り取った頭の最上部に腐蝕剤を置き、体液の流れを止めることを説いている。女性では咽喉の下を手で押して回復を計る。特別な治療法も二つあって、一つは薬物療法、一つは機械的療法である。薬物で抑えられるのは温の性質による疾患で、Rogerが支持する方法は酢を含んだローズ水による含漱である。また、バラ、白檀油、ザクロに適量の樟脳を加えて粉末として、カタツムリと合剤にしたものが良い。冷の性質による疾患のときは酢のシロップ剤、芥子、アンモニウム塩、明礬から成る含漱剤を用いる。Rogerは、また、レモン、コショウ、菊科植物、五倍子を推めている。Galenの書には薬用アヘンが記載されている。Asclepiadesは、口蓋垂の治療の処方として乾燥させたバラ、エノキさらに、ツバメの巣、ミルラ、五倍子を摺りつぶして粉末とし、外套管(cannula)で吹き込むといっている。その他の健康上の注意は、アンギーナのところで述べた。

口蓋垂に対する機械的治療法には、三つある。Albucasisによる第1の方法は、医師が一人で、苦痛を鎮めるもので、口を開き、適合するヘラで舌

を押し下げ、小剪刀または鎌状のヘラで切開する。つぎに酢の入った水を含漱用として与え、五倍子、明礬を貼付する。出血には菊科植物が良い。出血が続くときは Avicenna によれば、頸の後ろに吸角子を用いるという。出血に対しては、手厚い治療が必要である。第2の方法は、熱した鉄器で切るという Heben Mesue によるもので、外套管 (cannula) の側面の窓に口蓋垂を入れ、ある程度熱した鉄器を外套管に入れて切る。Albucasis の書による第3の方法は強く腐蝕することである。口蓋垂を外套管に入れた後、酒精、石灰、石鹼などから作った刺激性の薬剤、溶解した砒素その他の溶液を30分くらい作用させる。その後、ローズ油またはローズ水で含漱させると3日以内に脱落するが、薬品が他の部位に触れぬように注意する。Avicenna も同じことを述べているが、彼のもう一つの方法は薫蒸法である。アシ、ナナギハッカその他の薬剤を壺の中に入れ、酢で煎じたもので、外套管によって薫蒸するが、私は、その方法に慣れていない。「扁桃の腫張と増殖」について、扁桃と咽喉の腫脹の治療法は、上述した口蓋垂の膿瘍、アンギーナ性膿瘍と同様であり、治療しなければ必然的に、呼吸と嚥下の困難が起こると述べ、Haly ben Abbas や Albucasis の注意を含め、口蓋垂の治療と同様の方法を記述している。

「嚥下困難(注：咽喉につかえたとき)の治療」：「咽喉に何か刺さると、知覚が鋭敏になるので、舌を押えて鉗子で抜き取る。もし、抜き取れないときは鉛の棒を曲げたもので下方に押しとると、Avicenna は述べている。もし、刺さったものが見えないときは、粘るものを吞み込むことを Albucasis は教えている。その後、ブドー酒で含漱し、イチジクの煎じたものを用いる。スマレ、扁桃、バターから作って温めた油を頸に擦り込むことを推める。また、乾いたパンを一口に吞むと、下に落ちることがある。これらが、奏効せず嘔吐を訴えるときは、砕いたコショウ草をお湯で飲ませる。Avicenna も、嘔吐を防ぐ手段を構ずるべきであると述べている。どれも有効でないときは、強い糸に牛肉またはスポンジを結び付けたもので、つかえたものがとれることがある。咽喉につかえるものは、パン、ノギ、凝固した粘液などである。硬く大きなものときは、ヘラで舌を押え、頸の後ろを強く叩く。出血その他の障害のあると

きは、強い酢を用いると Haly ben Abbas はいっている。口を開けて見えるようなつかえをとり出すために、Avicenna や Albucasis は、薫蒸法や外套管による焼灼を推めている」

第7分冊、第1教科、第5章「鎮痛剤とその手技」の項は、創傷や膿瘍の痛みに用いる鎮痛剤についての記述であって、歯科領域に関連がないとはいえないが、それについての記述はなく、また、内容も薬品と処方薬の羅列であるので省略する。

第7分冊、第2教科、第2章「歯と歯肉の薬」：「歯の鎮痛には Heben Mesue によれば Azaram の解毒剤で証明されている菊科植物と鹿の角を煎じたものを口腔内に含むのが良いという。歯が黒く染まったときは Comite Altisiodore で証明されているような水で洗うが、その処方薬はアンモニア塩、岩塩、明礬を、蒸留器に置いて水にする。歯肉の灼熱感や癌性のもとに対してはスイカズラまたはオオバコの水を用いる。あるいは、洗滌薬の処方としてバラ、乳香、ウルシ、ザクロを水に入れて震盪させて泡立てたものに、酢を加え洗滌に用いるというものがある」

以上が、本書の歯科学的記述と考えられるものであるが、Joubert 本の巻末には、外科用器械の図版が一括して収載されている。この中に、口蓋垂の治療に用いられた外套管 (cannula) (図4) と抜歯用器械 (図5) がある。抜歯用器械については Paré の著書から引用したと書かれている。

考 察

本書は、14世紀に手稿の形で生まれ、16世紀に至るまで、標準的外科学書の名著として、各国語に翻訳され広く用いられた。しかし、内容は新鮮味に乏しく、ギリシャ、ローマ、アラビア医学の古典の集大成に過ぎないという批判もある。歯科学的記述だけについてみても Hippocrates, Asclepiades, Galen, Haly ben Abbas, Heben Mesue, Avicenna, Rhazes, Albucasis さらにイタリアの Roger, Lanfranc らの名が引用されて数多く見受けられる。

Guerini は紹介したが、川上は紹介するのを省略した歯の名称について Nicaise は、中切歯：duales, 側切歯：quadrupil, 犬歯：canini, 臼歯：molares, 智歯：caysales としているが、Joubert 本では、智歯は gemini となっている。

42 INTERPRETATIO
fatis est vt sit longum. Ecce cannula hæc dicta cum forficibus cauterizantibus ad incidendam & extirpandam vuulam : descripta ab eodem Guidone in sexto tractatu, doct. 2. cap. 2. part. 5. sub titulo, De passionibus labiorum, gingivarum & vuulæ.

A. Cannula.
B. Forfex cauterizans intus cannula.
C. Forfex cauterizans.
D. Cannula vacua.

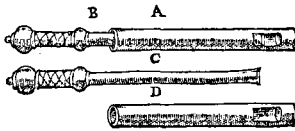


図 4

「アフタと口腔潰瘍」の項に、表在性の口腔潰瘍を Galen はアフタ, Avicenna はアルコラと呼んだとあって、アフタという病名はすでに、ローマ時代から使われていたことが判る。また、この項の中で、口腔内の瘻孔が抜歯によって治癒することがあると述べて、歯性の瘻孔の存在を認めている。

「下顎骨折の整復」の項に「包帯で下顎を被い、耳の下を通して頸の後ろで結び、さらに、前に廻して前頭部で結ぶ」という解説がある。これは現在の下顎投石包帯に近い方法と考えられる。

「顎関節脱臼」の記述の中に「回復は神が与え賜ったものである (Et sic restaurabitur, Deo dante)」という一節がある。これは Amboise Paré の有名な「われは包帯するのみ、神が癒したもう」という名言に相通ずるものがある。Guy de Chauliac は、外科医に対して、高い教養と豊かな人間性を求めたといわれている。

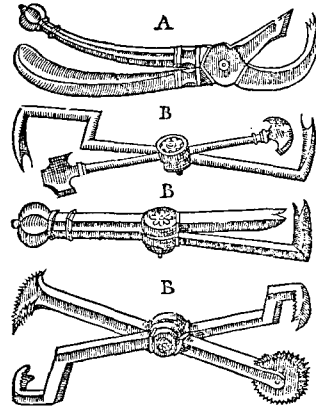
「舌疾患」の中で見られるように、当時すでに、ガマ腫 (ranula) という病名が存在していた。また、吃は、舌の麻痺やその他の舌疾患から引き起こされると考えられていたことは奇異に感じられる。

内容は省略したが「歯疾の一般用語 (または総論)」の中で、Guy de Chauliac は、歯科の治療に携わる人に対して dentatoribus および dentista という、今日の dentist にあたる呼称を初めて使ったといわれている (図 6, 図 7) 図 6 は Weinberger が Chirurgia magna の 1498 年版から採ったものであり⁴⁾、図 7 はそのおよそ 100 年後の Joubert 本のものである。両者は同じ部分であるが、活字も全く変わり、Joubert によって、字句の

DICTIONVM PHARM.

71

A. Forfex.
BBB. Pelicanus.



Venton, fid est cucurbitula, tam Græcè quàm Latine nomen cucurbitæ refert, scilicet & cucurbita. Ipsa comprehendit etiam cornicula, quæ ita sunt appellata, tam ratione materiæ ipforum, quæ ut plurimum est cornes, quàm ratione figuræ formæque ipforum.

AAA. Cucurbitulæ.
BB. Cornicula.

図 5

修正が行われていることが判る。文中で dentatoribus は「特殊な処置は主として理髪師や歯科専門家 (dentatoribus) が行う」という形で使われ、dentista は「歯科専門家 (dentista) は処置に適する多くの器械を用意しなければならない」という形で使われている。dentatoribus, dentista とともに、歯科専門家と訳したが dentatoribus はいわゆる「歯抜き人」であり、dentista は「歯科専門家」の意味を持っているように考えられる。Weinberger も、dentista という呼称を初めて使ったのは Guy de Chauliac であらうと、彼の歯科医学史の中で、とくに 1 章を設けて論述している⁴⁾。そして Guy de Chauliac は「医師は特殊な技術を必要とする歯科の処置を行う権利を放棄して、理髪師や歯科専門家に歯科の処置を委ねているが、患者の安全のためには、医師の監督下に処置させるのが良い」と考えてはいたが、歯科専門家の必要性も認めていたようである。これを裏付けるように、本書に「打撲などにより弛緩した歯は、小さな金の鎖で、健全な歯に結紮する」と記述されている点について、Guerini は「小さい金の鎖では、弱くて結紮できないので、Guy は歯科臨床に余り精通していなかったのではないかと述べている¹⁾。

巻末の図版で、Joubert は Ambroise Paré の抜歯用器械の図を、そのまま引用している (図 8 の

Incuratione passionis dentium dicitur duplex regimē
monitū videlicet & particularis.
Unū in vitalia in euacuatione specifical cum eo vita
in 6^{to} fin. Aui. ¶ Primo qđ qđ nō vñt putrefactibili-
bus velut sunt pīces & lactancia. ¶ Secūdo qđ euidentur
res exēlētē calidē: etiā fridē pōpē immediate vinum
post aliud. ¶ Tercio qđ non mallicent res dure vt ossa
& viscosē vt ficus & pēctōes de melle. ¶ Quarto qđ nō
vñt cibaria de ppietate quoz est nocere & dēribus vt
sunt porci. ¶ Quinto qđ dētes nō curent exquiritē neq;
acerbe. ¶ Sexto qđ fricent cum melle & sale adfuso. Et
si cum eis adderet acetum omni esset completum vt
declarauit Dalyab. In finone scilicet partis dispositionis
regalia. ¶ In purgatione appropriat yera & flōbotomia
de cephalica & yena p labiis & lingue & diuertere cū fric-
tionibus & petosis & capipurgis: & delectatione reu-
matia & confortatione capitis: vt dictum est sepe & edu-
cere flegmaticas humiditates cum pietro mallice & cō-
similibus sepe dictis.
¶ Particulare regimē pōtuit duo, pmo tria documen-
ta ad operationem dentium necessaria. Scilicet opera-
tiones ipsam iuxta passionum diuersitates.
¶ Primum documentū est qđ iste operationes sunt particu-
lares maxime appropriatē barbifloribus & pēctōibus.
Et ideo medici istā operationē dictā eis reliquerunt. 2^{um} au-
tē est vt tales operationes per medicos dirigant.
¶ Scđm documentū est qđ opz medicū plūrent in tali-
bus: qđ sciat qđ cōsilia dentium fin. Aui. sūt multiplex: vide-
licet per collutiones & per gargarismata malliciones:
impleriones: vaporaciones: linimenta: fricationes: suffu-
migationes: cauterizationes: caput purgationes: dilutiones
in aurib: & p manū operationes vt in suis locis dicim.
¶ Tercium documentū est qđ fin. Aui. pōtēt pēctō-
nitas esse munitus de aptis instrumentis: videlicet raso-
ris: spatulaz: & spanumib: rectis & curuis & leuatoz: sim-
plicibus: cum duobus ramis tenaculū dentariū & pō-
bis diuersis canulis scalpris & terebellis: etiā limis &
mulis alijs in hoc opere necessarijs &c.

Fig. 86.—From Guy de Chauliac's *Chirurgia Magna*, wherein the designation *dentiste* is used for the first time in a printed edition. 1498.

Fig. 86

De passionib. dentium.

315

Incuratione passionum dentium datur duplex regimen: vniuersale videlicet, & particulare. Vniuersale regimen in genere duas habet intentiones: vnam in vita, reliquam in euacuatione. Specificatur vita in sex, secundum Aui. Primū quidem vt non vñantur putrefactilibus, velut sunt pīces & lactancia. Secundū, vt euidentur res excellētē calidā, & etiā frigidā, pēctōes: vt euidentur res duras, velut ossa & viscosē, vt ficus & pēctōes de melle. Quartū, vt non vñantur cibarijs, de proprietate quorum est nocere dentibus, vt sunt porci. Quintū, vt dentes non repugnent exquiritē, neque acerbe. Sextū, vt fricentur melle & sale adfuso: Et si eis adderetur acetum, omne esset complementū, vt declarauit Dalyab. In sermone quinto scđm partis dispositionis regalia. Ad purgationem propria est hiera: & phlebotomia conuenit & cephalica, & venis labiorum & lingue & diuertere fricationibus, & cucurbitulis & caput purgus: & delectatione rheumatis, & confortatione capitis, vt dictum est sepe: & educere phlegmaticas humiditates pyrethro, malliche, & consimilibus sepe dictis.

Particulare regimen concernit duos: Primū, tria documenta ad operationem dentium necessaria. Secundū, operationem ipsam iuxta passionum diuersitatem. Primum documentū est, quod sit operationes sunt particulares, maxime dicatē barbifloribus & pēctōibus. Et ideo medici istā operationem eis reliquerunt. Tūm tamen est vt tales operationes a medicis dirigantur. Secundum documentū est, quod oportet medicum confulentem in talibus, scire cōsilia dentium secundum Aui. scilicet multiplex: videlicet per collutiones, & per gargarismata, mallicatoria, im- pletiones, vaporaciones, linimenta, fricationes, suffumigationes, cauterizationes, caput purgationes, dilutiones in auribus, & per manuum operationes, vt in suis locis dicetur. Tercium documentū est, quod secundum Albucorietem, & spataminibus rectis & curuis, & leuatoz simplicibus, & cum duobus ramis, forcipibus dentatis, & specillis & ueris, canulis, scalpris, & terebellis, & etiā limis, & multis alijs in hoc opere necessarijs, &c.]

De dolorē dentium.

Si quidem dolor fuerit ex communicatione alterius membri, tunc curatur prius illud membrum. Si autem fuerit propter apostema gingiarum, purgata materia & eius diuersione facta, in primis repercutiatur materia calida frigida & hyrcinis, velut est (secundū Heben Mesic) retentio aque salsae calidae cum aceto in ore aut aque rosae plantaginis. Et si poneretur eis salsum modicum camphorae, melius esset. Et huius quidē intentionis est oleum ex rosae, aut myrrinum, aut onychinum ore retentum. Cum autem transit principium, addamus supradictis aliqua resolutiua, sicut est malliche, & uax pax. Quod si dolor vehementer freta datur eis aliquid opij, aut aliorum narcoticorum, si fuerit necesse. In causa verò frigida in principio ponatur oleum rosae cum malliche, deinde vinum aluminatum, postea

Fig. 7

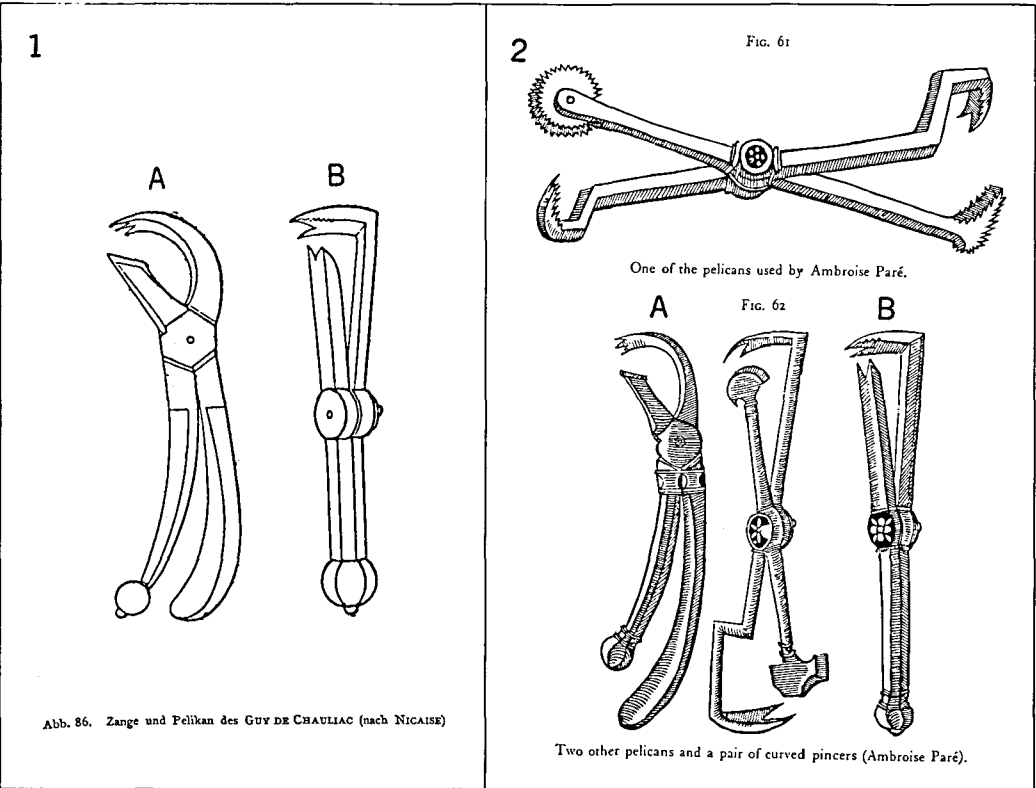


Abb. 86. Zange und Pelikan des GUY DE CHAULIAC (nach NICAISE)

Two other pelicans and a pair of curved pincers (Ambrose Paré).

Fig. 8

2)⁵⁻⁶⁾。その図版には鉗子1, ペリカン3が描かれている。Sudhoffは、彼の歯科医学史の中に、Nicaise本からの引用と明示した上でGuy de Chauliacの抜歯用器械として鉗子1, ペリカン1を掲載している(図8の1)⁷⁾。図8の1, 2にあるAとBは、全く同じものであるから、Paréは逆にGuyのものを引用したことになる。しかし、このことはGuyの原著をみなければ断定はできない。また、図8のBはペリカンの最も原始的なものである。

ま と め

14世紀の優れた外科医Guy de Chauliacの著した本書における歯科学的記述について、Gueriniが紹介した部分は、歯の疾患のみに限られているが、本書にはこの他にも、今日の歯科臨床で取り扱われている疾患が記述されていた。すなわち、舌、口唇、口蓋垂、扁桃などの疾患、ガマ腫、アフタ、顎関節脱臼、下顎骨折などである(表2)。また、Joubert本の巻末に集められた図版の中に、口蓋垂治療用の外套管(cannula)と抜歯用器械の図版がある。抜歯用器械の鉗子1とペリカン3の図はAmbroise Paréの外科学全集の図版をそのまま引用したものである。

稿を終るにあたり、終始有益なご助言を賜った松本歯科大学 橋口緯徳教授に深く謝意を表します。

文 献

- 1) Guerini, Vincenzo (1909) A History of Dentistry, 142—149. Lea & Febiger, Philadelphia & New York.
- 2) 川上為次郎 (1931) 歯科医学史, 183—191. 金原商店, 東京.
- 3) Keil, Gundolf (1976) Chirurgia magna Guidonis de Gualiaco. Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt.
- 4) Weinberger, B. W. (1948) An Introduction to the History of the Dentistry. Vol. I. 1, 219—225. The C. V. Mosby Co., St. Louis.
- 5) Op. cit. 1) 193.
- 6) 高山直秀 (1985) パレ全集第12版にみられる歯科領域の記述(5). 歯医史, 11: 61—63.
- 7) Sudhoff, K. (1921) Geschichte der Zahnheilkunde. 135—136. Verlag J. A. Barth, Leipzig.

表1: Chirurgia magna の目次

第1分冊	解剖
第1教科	解剖総論
第1章	解剖の一般用語、体の仕組み
第2章	外皮、脂肪、筋肉の解剖
第3章	神経、靱帯、腱の解剖
第4章	静脈、動脈の解剖
第5章	骨、軟骨、爪、毛髪
第2教科	解剖各論
第1章	頭蓋の解剖
第2章	顔面とその付近の解剖
第3章	頸、背中の解剖
第4章	肩胛骨、上膊または大きな手の解剖
第5章	胸部とその付近の解剖
第6章	腹部とその付近の解剖
第7章	肘とその付近の解剖
第8章	脛または大きな足の解剖
第2分冊	膿瘍、腐敗、膿疱
第1教科	膿瘍、膿疱、腐敗の総論
第1章	膿瘍、膿疱、腐敗の一般用語
第2章	真性蜂窩織炎、出血性膿瘍
第3章	章を補う：癰、疔、狼瘡その他の悪性出血性膿疱
第4章	丹毒、胆汁性膿瘍
第5章	章を補う：痒み、ヘルペス、悪性胆汁性膿瘍
第6章	浮腫その他の蜂窩織炎性膿瘍
第7章	章を補う：含気性膿瘍
第8章	章を補う：含水性膿瘍
第9章	章を補う：結節、腺腫、腺病疹、増殖性蜂窩織炎
第10章	硬性癌、黒胆汁性膿瘍
第11章	章を補う：上述の硬性癌、通常の腐病による黒胆汁性膿瘍粘液質から発生する凍症、硬結
第12章	章を補う：第4分冊で述べる潰瘍、第6分冊で述べる類
第2教科	膿瘍、腐敗、膿疱の各論
第1章	頭部の膿瘍、子供の水頭症
第2章	顔面とその付近の膿瘍、眼炎、眼痛、角膜下の膿、角膜深潰瘍次の第3、4、5で論ずる他の疾患、耳、鼻の膿瘍
第3章	頸と背中の膿瘍、アンギーナ、頸部気腫(あるいは甲状腺腫)背中の膿瘍、第6分冊で論ずる何俣病
第4章	肩胛と上膊の膿瘍、瀉血による膿瘍、動脈瘤、手の痛風、指の癰性膿瘍、癰疽
第5章	胸部の膿瘍、横痃(または腺ペスト)、救命法、排泄による膿瘍の消失と硬結、乳房膿瘍、乳汁の凝固、胸壁の膿瘍
第6章	腹部の膿瘍、胃の硬化、肝の硬化、脾の硬化、浮腫
第7章	陰部とその付近の膿瘍、体液性ヘルニア、陰囊水腫、含水性ヘルニア、睪丸腫瘍、精系静脈瘤(第6分冊で述べる腸と腹網膜のもの)、陰茎膿瘍、肛門膿瘍、第4分冊で述べる痔疾
第8章	腰部の膿瘍、脛部または大きな足の膿瘍、象皮病、正中静脈瘤、第6分冊で述べる足痛風、第3分冊 創傷
第1教科	創傷総論
第1章	創傷の一般用語と解釈、矢や打ち込まれたものを抜く方法、結紮の方法と種類、縫合の方法と種類、綿織糸束の方法と種類、ほどき木綿とランブの芯の方法と種類、創傷時の規定食餌、疼痛、膿瘍、悪液質、熱、痙攣、麻痺、失神その他の偶発症の是正
第2章	筋肉に起こる創傷、切傷で実質欠損の無い小さな創傷、切傷で深くない表在性の大きな創傷、深く潜在的な創傷、実質を喪失して中空の創傷、皮膚

- を喪失した創傷、再生し癒着して過剰な肉質となった創傷、間歇熱、疼痛、蜂窩織炎を伴う打撲傷（自損の打撲）、殺人、毒矢による創傷、
- 第3章 静、動脈から出血する創傷
- 第4章 神経、腱、靱帯の創傷、神経刺傷、神経切傷、神経露出、神経の摩耗と挫碎
- 第5章 骨と軟骨の創傷
- 第2教科 創傷治療各論
- 第1章 頭部創傷、頭蓋骨折のない切傷による頭部創傷、穿孔のない頭蓋骨折を伴う切傷による頭部創傷、表在性穿孔で骨質欠損のない頭蓋骨折を伴う切傷による頭部創傷、骨質を欠損した創傷、頭蓋骨折のない頭部打撲傷、小さな頭蓋骨折のある打撲傷、大きな骨折のある打撲傷、頭部創傷に伴う偶発症の改善、頭部の薬治、頭部創傷手術の器械
- 第2章 顔面の創傷、眼の創傷、打撲による眼の創傷、Tarfen、創傷や打撲による眼内出血、眼瞼の創傷、鼻の創傷、耳と口唇の創傷
- 第3章 頭部の創傷
- 第4章 肩胛と上膊の創傷
- 第5章 胸部の創傷
- 第6章 腹部の創傷
- 第7章 陰部の創傷
- 第8章 腰部、脛部、足の創傷
- 第4分冊 潰瘍
- 第1教科 潰瘍総論
- 第1章 潰瘍の一般用語、悪液質性潰瘍、有痛性潰瘍、膿瘍を伴う潰瘍、打撲による潰瘍、贅肉性潰瘍、口唇の硬結と変色を伴う潰瘍、潜在性潰瘍、静脈瘤のある潰瘍、腐骨を伴う潰瘍、治療の困難な潰瘍
- 第2章 よく知られた潰瘍、有毒性腐蝕性潰瘍
- 第3章 不潔で悪臭のある潰瘍
- 第4章 深く窪んだ瘍
- 第5章 特殊な瘻孔のところで述べた瘻孔性潰瘍
- 第6章 膿瘍のところで述べた潰瘍ではない癌性潰瘍
- 第2教科 潰瘍各論
- 第1章 掘削性で弓状の頭部潰瘍
- 第2章 顔面の潰瘍、私に触れるなかれ、癌性囊胞破裂性潰瘍、眼のブドー膜挙上、角膜破裂、ブドー膜脱離、鼻のすぐ近くにある涙腺の瘻孔、鼻の潰瘍とポリープ、鼻出血、アフタと口腔潰瘍、耳の潰瘍
- 第3章 頸部の潰瘍、背中の潰瘍
- 第4章 肩胛と上膊の潰瘍
- 第5章 胸部の潰瘍
- 第6章 腹部の潰瘍
- 第7章 陰部の潰瘍、陰茎下部の肥厚、包皮の穿孔、痔疾、痔核、痔瘻、裂創
- 第8章 癌性あるいは悪性致死性で悩まされる腰部、脛部、足の潰瘍
- 第5分冊 骨折と脱臼の接合、牽引、整復
- 第1教科 骨折の整復
- 第1章 骨折整復の一般用語
- 第2章 頭蓋、鼻骨、下顎骨折の特別整復
- 第3章 頸部、脊椎骨折
- 第4章 鎖骨、ヘラ形すなわち肩胛骨骨折
- 第5章 支持骨、上膊骨、肘、Rascetaと手全体の骨折
- 第6章 肋骨、胸部の骨折
- 第7章 陰部と腰部の骨折
- 第8章 膝、脛部、足全体、脛骨、踝、足の Rasceta、足の関節の骨折
- 第2教科 脱臼の整復
- 第1章 脱臼の一般用語
- 第2章 顎関節脱臼
- 第3章 頸部、脊椎の脱臼
- 第4章 上腕骨と肩胛骨の脱臼
- 第5章 肘の脱臼
- 第6章 手と指の脱臼
- 第7章 坐骨または腰の脱臼
- 第8章 膝と膝蓋の脱臼、膝蓋骨、足と指の脱臼
- 第6分冊 膿瘍、創傷、骨の疾患以外で外科的に治療できる総ての疾患
- 第1教科 疾患総論
- 第1章 硬結を伴う関節痛
- 第2章 癩
- 第3章 斑紋癩、匍行性癩、疥癬、掻痒症、シラミ、その他の伝染性皮肤病疾患
- 第4章 体の衰弱と肥満
- 第5章 創傷のところで述べた打撲による落下、衝突、彎曲、陥没
- 第6章 火傷
- 第7章 頭瘡、瘤、角化
- 第8章 四肢の過剰期の切除、死体の保存法
- 第2教科 疾患各論
- 第1章 頭部の疾患、毛髪、虫、禿、脱毛、白髪、毛髪の変遷、これらに使用するチンキ剤、洗髪液、毛髪の消失、再生を防止する抜毛
- 第2章 顔面その付近の性質、5部から成る
- 第1部 顔面の装飾、顔色を良くする、痣、赤痣、パヌスを除去する、致命的出血を伴う顔面その他の部分の青痣、癰を伴う天然痘、しゅき鼻、顔面の膿疱
- 第2部 上で取り扱わなかった眼の疾患、眼痛、膿疱、腐敗、いわゆる膿瘍による角膜下の膿、眼に突き刺さった眼と眼瞼の創傷、創傷で取り扱った Tarfen、癌性潰瘍、水疱破裂、ブドー膜の挙上、涙腺の瘻孔、ここにおいて潰瘍で取り扱った眼を補完する、4つ数えられる眼の疾患の第1は流涙、眼全体の肥厚による突出、その反対の萎縮、斜視、眼と眼瞼の疾患で取り扱うものが24あって第1は疥癬、掻痒症、眼瞼の下垂と弛緩、眼瞼の収縮と翻転、眼瞼の膠着、逆さ睫、睫の脱落、白睫、シラミ、硬結、悪性腫瘍、麦粒腫、Gradine、Sulac、乾燥、桑実状の疣、13を数える結膜の疾患の第1は角膜爪、そのところで述べた Sebel、10を数える角膜の疾患の第1は角膜斑、白内障、黒内障、視力障害を起こす眼の内部の疾患
- 第3部 耳の疾患、第1は聾の一般用語、膿瘍、潰瘍、冷と含気性体液による聾と耳鳴り、不潔性聾、耳に小石、核、小動物の迷入、その他の閉塞、皮下脂肪層、疣などの肉質による耳の閉塞
- 第4部 鼻疾患、Cathesiali 閉塞、呼吸悪臭、ポリープ、潰瘍で述べた鼻出血
- 第5部 口腔疾患、舌疾患、舌の異常な腫脹、舌下のガマ腫、舌の痙攣と収縮、舌の麻痺と吃、上述したアフタ、潰瘍、膿瘍、歯疾の一般用語、歯痛、動揺と弱り、腐敗、虫歯、侵蝕、歯の穿孔、歯の汚れと変色、歯の麻痺と癰結（歯が浮く）、抜歯、口唇と歯肉の疾患、含漱、口蓋垂の膿瘍と脱落、扁桃の腫脹と増殖、嚥下困難の治療
- 第3章 頸部疾患、拘偻病、膿瘍で述べたアンギーナと頸部氣瘤、
- 第4章 肩胛、小腕、乳房の疾患、指の癒着、過剰な指の切除、打撲、致命的出血、爪の下の膿、拘偻病、彎曲、裂溝、変色
- 第5章 胸部と乳房の疾患、巨乳症、小乳頭、膿瘍で述べた乳房の硬結と膿瘍
- 第6章 腹部疾患、臍の隆起、膿瘍の浮腫で述べた腹部ヘルニア
- 第7章 陰部とその下部の疾患、睾丸破裂または脱腸、脱腹網膜、膿瘍の肥満で述べた体液性含気性浮腫、膀胱、腎結石、小便させて行う緊急外科的治療、結石の除去、冷か悪行による陰茎疾患、持続性勃起、醜い陰茎の整形、女性を醜くする痔瘻、割礼

	の禁止、子宮の腫脹と膨脹、胎児の摘出、後産の摘出、鬼胎、子宮と Logaonis の死、潰瘍で述べた痔疾、痔核、Atricibus、裂痔
第 8 章	腰部、脛部、足の疾患、死を選ぶ、粘性性 Salso、疼痛、踝の凍傷、膿瘍で述べた象皮病、第 1 教科の Clavis と Portis、手の章で述べた爪の疾患
	第 7 分冊 解毒剤
	第 1 教科 解毒剤総論
第 1 章	瀉血、吸角子、放血
第 2 章	消化剤、体液瀉下剤、嘔吐剤、浣腸剤、坐薬
第 3 章	腐蝕薬とその性質
第 4 章	外科医術に適合した解毒剤の精巧に準備された方法、油、膿、テレビンチナ、バター浴、石灰浴、洗浄剤、酸化亜鉛製剤、立ち会い診察、薬剤の整頓、油剤、軟膏、硬膏剤、湿布剤その他
第 5 章	膿瘍部の解毒剤、反応薬、反応させる方法、誘導薬、誘導の方法、消散剤、消散の方法、軟化剤、軟化の方法、起化膿剤、起化膿の方法、清浄剤、洗浄剤、入浴剤、清浄の方法、鎮痛剤とその手技
第 6 章	創傷、潰瘍部の解毒剤、止血剤、組織化剤、組織化の方法、組織再生剤とその手技、癒着を起こす薬とその手技、腐蝕薬、収斂薬、皮膚腐蝕薬
第 7 章	骨折と脱臼の薬剤、膿瘍予防薬、膠着剤、強化剤、硬結軟化剤、修復後遺症
第 8 章	外科薬剤の歩み
	第 2 教科 解毒剤各論
第 1 章	頭部独自の救助薬
第 2 章	顔面の救助薬、装飾剤、眼、鼻、耳、歯と歯肉の薬
第 3 章	頸部の救助薬
第 4 章	上膊、背中、乳房の救助薬
第 5 章	胸部の救助薬
第 6 章	腹部の救助薬、浮腫性疝痛、腎、膀胱の疼痛
第 7 章	陰部とその下部の救助薬、陰茎、睾丸、卵巣、子宮、肛門
第 8 章	腰部とその下部の救助薬

注：アンダーラインは、Guerini が紹介した部分
ゴシックは、筆者が追加した部分

表 2：目次の中の歯科学的記述を集約したもの。

	Tr. I 解剖
Doc. II Cap. 2	顔面とその付近の解剖
	Tr. III 創傷
Doc. II Cap. 2	耳と口唇の創傷
	Tr. IV 潰瘍
Doc. I Cap. 1	口唇の硬結と変色を伴う潰瘍
Doc. II Cap. 2	アフタと口腔潰瘍
	Tr. V 骨折と脱臼の接合、牽引、整復
Doc. I Cap. 2	下顎骨折の特別整復
Doc. II Cap. 2	顎関節脱臼
	Tr. VI 膿瘍、創傷、骨の疾患以外で外科的に治療できる総ての疾患
Doc. I Cap. 8	四肢の過剰部の切除
Doc. II Cap. 2	Par. 5 口腔疾患、舌疾患、舌の異常な腫脹、舌下のガマ腫、舌の痙攣と収縮、舌の麻痺と吃、上述したアフタ、潰瘍、膿瘍、 <u>歯疾の一般用語、歯痛、動揺と弱り、腐敗、虫歯、侵蝕、歯の穿孔、歯の汚れと変色、歯の麻痺と凝結（歯が浮くこと）、抜歯</u> 口唇と歯肉の疾患、含漱、口蓋垂の膿瘍と脱落、扁桃の腫脹と増殖、嚥下困難の治療
	Tr. VII 解毒剤
Doc. I Cap. 5	鎮痛剤とその手技
Doc. II Cap. 2	歯と歯肉の薬

注：Tr. は Tractatus (分冊)、Doc. は Doctrina (教科)、Cap. は Capitulum (章)、Par. は Pars (部) の略、アンダーラインは Guerini が紹介した部分